富田林市文化財調査報告 83

甲　田　遺　跡

－宅地造成に伴う発掘調査報告・その２（KD2023－1）－

2024．1．31　富田林市教育委員会

１．はじめに

宅地造成に伴う発掘調査である。調査地は石川の西岸の河岸段丘の縁辺に立地する。甲田遺跡の東端に位置し、すぐ南側には水路と並行して東高野街道が通る。当該地は 2022 年に本調査（ＫＤ2022-1）を実施したが、調査後、計画の見直しが行われ、大幅な設計変更がなされた。そのため、協議を行い、新規道路敷設部分において未調査部分の調査を再度行うこととなった。調査は 2023 年７月 12 日から８月 10 日まで行った。実働 20 日間である。昨年度との重複部分を含めた調査総面積は 169.12 ㎡で、実質の調査面積は 71.9 ㎡である。

調査は今回の調査範囲のうち、重複分は昨年度の掘削底まで、未調査分は第１面直上までを機械で掘削し、実質の調査範囲を確定した。未調査部分は３箇所に分かれ、北側からＡ区、Ｂ区、Ｃ区と呼称した（図 1）。

ＫＤ2022-1 調査では、中世の遺構面を２面検出し、ＧＬ-0.8mの深さまで掘削した。第１面はＧＬ-0.35 ～ 0.4mを測り、合わせ口の羽釜を埋納した SX58 をはじめ、多くのピットや溝を検出した。第２面はＧＬ-0.5mを測り、ピットや土坑のほか隣接する 2007 年調査地から続くと思われる落ち込みを確認した。遺物は中世～古墳時代の土器及び縄文時代の石鏃が出土している。なお、ＫＤ2022-1 調査の成果はすでに報告済みである。あわせてそちらも参照されたい。

図１　調査位置及びトレンチ位置図（Ｓ=1/5000）

２．調査成果

基本層序（図２）及び遺構面は、ＫＤ2022-1 調査と相違ない。掘削深度は、Ａ区でＧＬ-0.6m（下層確認部分を含めるとＧＬ-0.9m）、Ｂ・Ｃ区はＧＬ-0.5mである。層序は 0.35m厚の耕土と床土の下は、0.15m厚の黄灰～灰黄褐色砂質土の中世包含層（Ⅲ層）、0.1m厚の褐灰色砂質シルト及び灰黄褐～暗灰黄色シルト質砂質土の中世以前の包含層（Ⅳ層）で、Ａ区に限り 0.2m厚の黒褐色粘質土層（Ｖ層）がみられる。その下はＧＬ-0.5 ～ 0.7mで検出した地山層（Ⅵ層）で、にぶい黄褐色砂礫混じり粘質土ないしは、河岸段丘の基盤層と思われるにぶい黄橙色砂礫土である。

遺構面は２面あり、Ⅳ層上面（第１面）とＶ層及びⅥ層上面（第２面）で確認した（図３）。

第１面はＧＬ-0.35 ～ 0.4mで検出した中世前半の遺構面である。Ｃ区は耕土直下地山で、削平を受けており、第１面にあたるベース層が見当たらなかった。Ｂ区ではピット５基　Ａ区ではピット３基、土坑１基、耕作溝 13 条を確認した。耕作溝はその大半が南北方向である。

第２面はＧＬ-0.5 ～ 0.6mで検出した。Ｃ区で

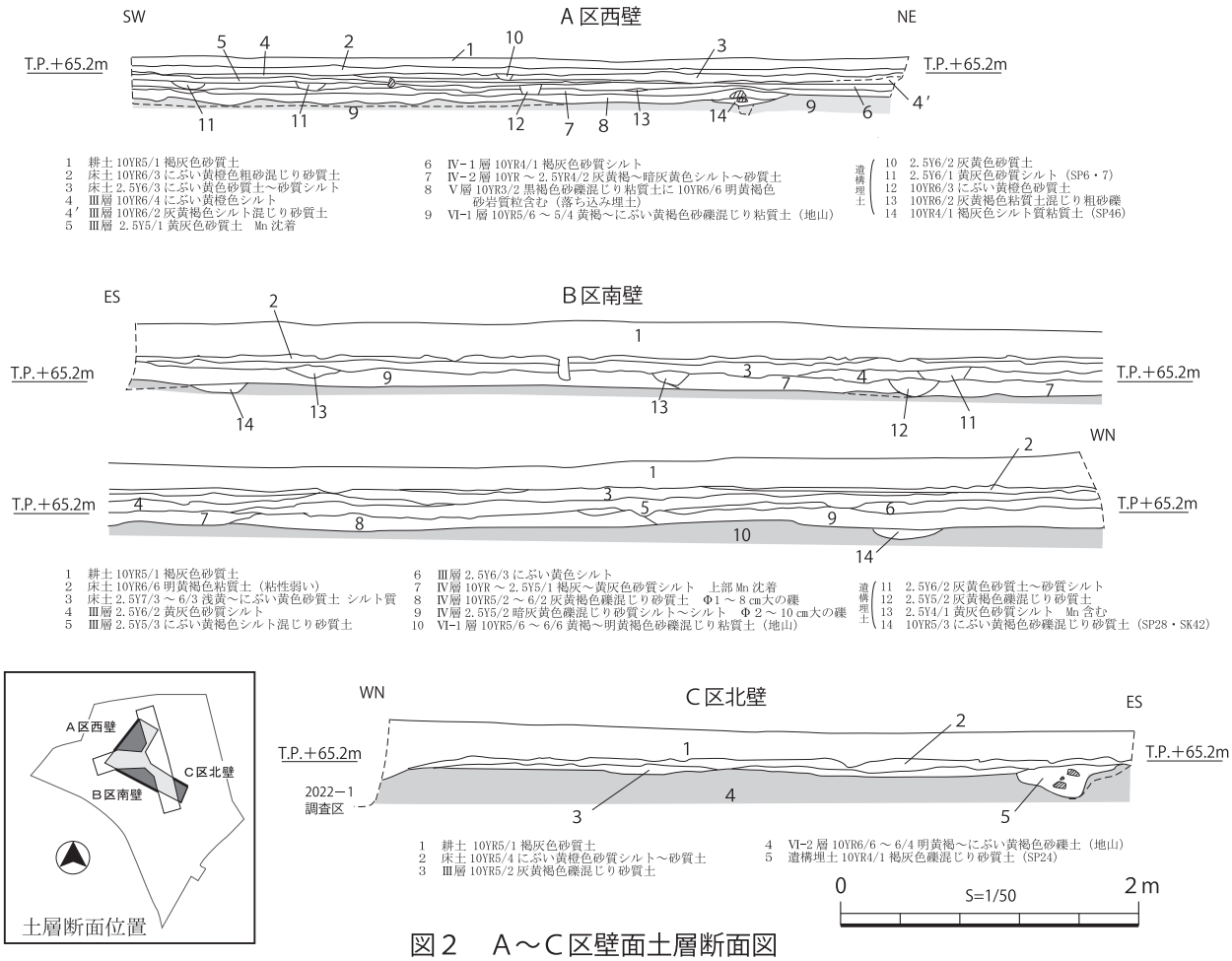

図２　Ａ～Ｃ区壁面土層断面図

はピット４基を確認した。Ｂ区ではピット 17 基、土坑１基と、ＫＤ2022-1 調査で確認したピットの続きを検出した。Ａ区ではＫＤ2022-1 調査でみつかった落ち込み（Ｖ層）の肩部の続きを確認した。落ち込みの上面では遺構埋土との判別が難しく、ピットは２基を確認しただけであったが、落ち込み埋土除去後の地山面（第２面下）ではピット 29 基、土坑１基、溝１条を検出した。これらの遺構は壁断面の様相や埋土、ＫＤ2022-1 調査との検証から、本来、落ち込みの上面から切り込んでいたと思われ、第２面の遺構と認識した。

第２面の出土遺物は、土師器の小片もしくは細片のみである。Ａ区第２面下では遺構から遺物はみつからなかったが、落ち込み埋土中より古式土師器甕（図４-11）が出土した。落ち込みは古墳時代前期頃に堆積していたと思われる。

遺物はコンテナ１箱分出土した。瓦器、土師器、須恵器、瓦質土器、黒色土器、瓦、中国製の青磁や白磁、サヌカイト製の剥片や石鏃、鉄釘などが出土したが、全体的に小片である。その中から 12 点を図化した（図４）。遺構出土遺物は細片のため図化できなかった。第１面の遺物は瓦器が主体で、第２面は土師器が多いが、時期の特定は困難な傾向がある。包含層出土遺物の多くは中世のもので、古墳時代中期の遺物も一定数確認している。

１～８は第１面直上の包含層から出土した。1 は土師器小皿である。２は瓦器小皿、３～７は瓦器埦である。４～６は見込み部に格子状やジグザク状の暗文が残る。８は中国製白磁碗で玉縁状口縁を持つ。いずれも 13 世紀の所産である。

９・10 は第２面直上の第１面ベース層から出土した。９は瓦器埦で、口縁端部に段をなす大和型と思われ、圏線は密で口縁端部まで巡る。10 は土師器皿である。図化できなかったが、「て」の字状口縁を持つ土師器小皿片もみつかっている。

このほか、縄文土器または弥生土器と思われる

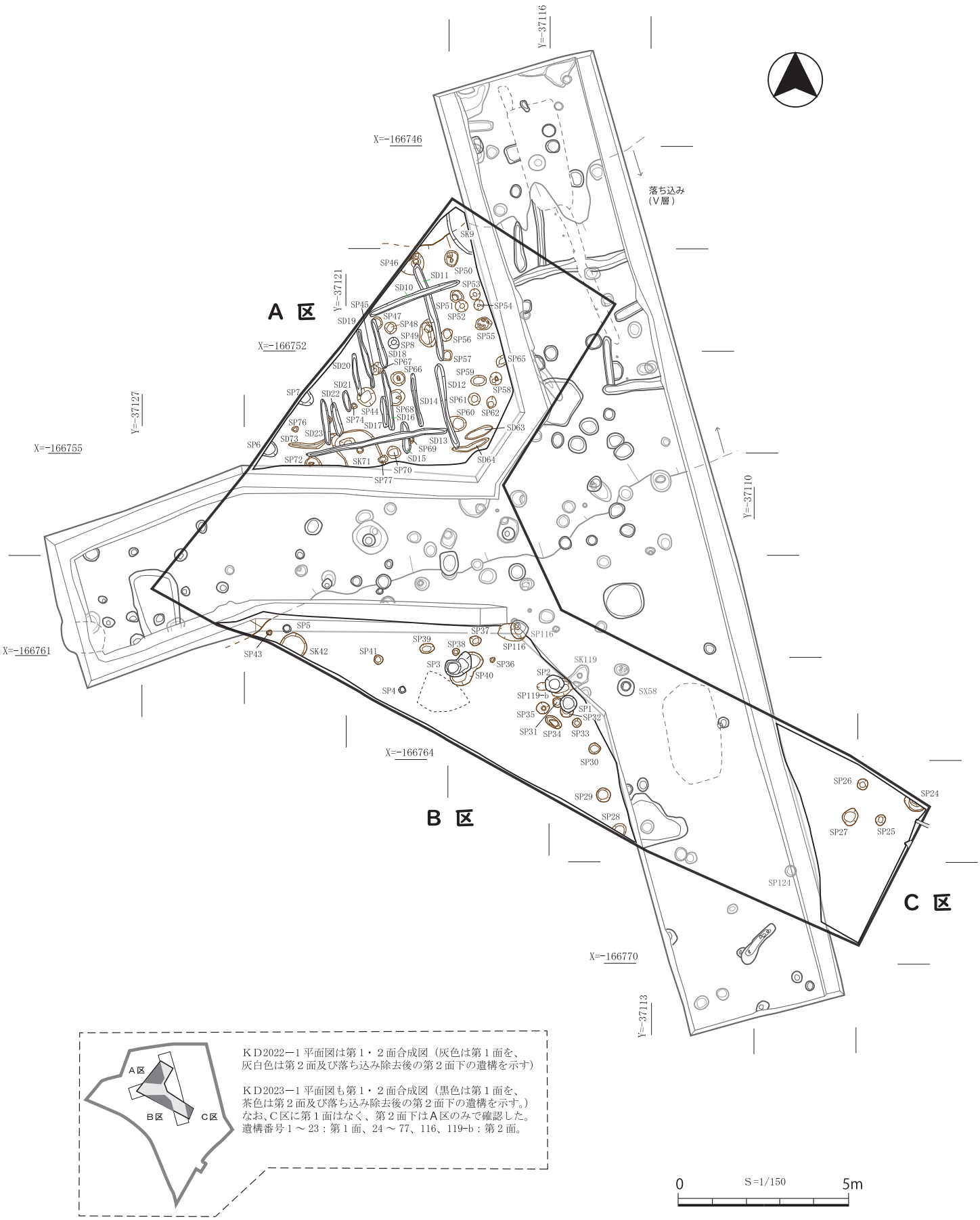

図３　KD2022－1 および KD2023－1 調査区合成遺構平面図

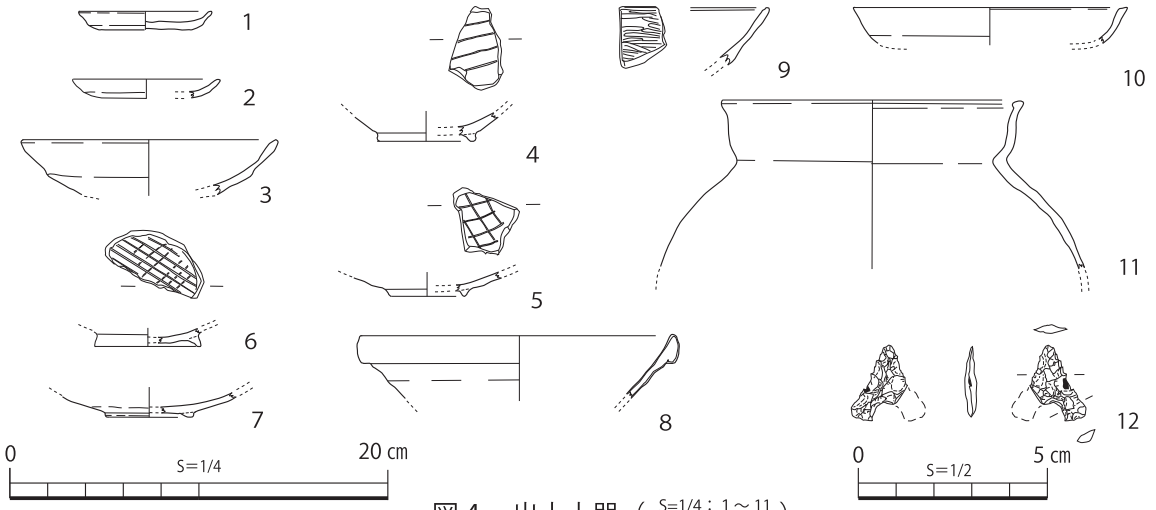

図４　出土土器（ S=1/4：1～11 S=1/2：12 ）

底部片や、縄文時代の石鏃を確認している。石鏃(12)は最大長２㎝を測る。残存は1/2ほどである。滋賀里Ⅱ～篠原式並行のものと考える。

落ち込みからは古式土師器甕（11）が出土している。この甕は復元径15.8㎝、残存高8.9㎝を測り、上半部のみ残存する。口縁部は肥厚し、体部は球体化している。磨滅が著しく、調整がかろうじて確認できる程度で、外面にハケ、内面にケズリを施す。布留式新相の最終段階（５世紀中葉）のものであろう。落ち込み埋土からは同時期の別個体の甕の口縁部も数点出土している。この時期の遺物としてＡ・Ｂ区の第１面ベース層から「く」の字状口縁の甕や高坏などを確認している。

３．まとめ

基本的な成果はKD2022-1調査と同じである。ただ、第１面のベース層に「て」の字状口縁の土師器皿及び黒色土器Ｂ類と思われる小破片を含んでおり、落ち込み埋積後の第２面の利用は10世紀後半以降であったと推察される。今回の調査で落ち込み内から古墳時代前期後半の古式土師器甕が出土したことは大きな成果である。ＫＤ2022-1調査では落ち込みの埋土上部で古墳時代～中世の遺物が出土しただけで、落ち込みの堆積時期の確定ができなかったが、これによって湿地状堆積となっていた落ち込みの埋積時期は５世紀中葉～後半まで遡ることがわかった。

参考文献
富田林市教育委員会 2008『甲田遺跡・喜志南遺跡発掘調査報告書』
富田林市教育委員会 2012『甲田遺跡－農地整備に伴う発掘調査報告書（KD2012－1）－』
富田林市教育委員会 2023『甲田遺跡－宅地造成に伴う発掘調査報告書（KD2022－1）－』

報 告 書 抄 録

ふりがな	こうだいせき			副書名	宅地造成に伴う発掘調査報告・その２(KD2023-1)			
書名	甲 田 遺 跡			シリーズ名・番号	富田林市文化財調査報告83			
編集機関	富田林市教育委員会			編著者名	西村 雅美			
所在地	〒584-8511　大阪府富田林市常盤町１番１号							
発行年月日	2024（令和6）年 1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	発掘原因
こうだいせき 甲田遺跡	とんだばやししこうだいっちょうめ 富田林市甲田一丁目	27214	43	34°29’45”	135°35’39”	20230712～20230810	169.12㎡	記録保存調査（宅地造成）
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
甲田遺跡	集落跡	中世	ピット、溝、土坑、落ち込み	瓦器・土師器				

印刷　明朗社